

集う力

ちから

団体・業界の挑戦

身近な構造物に大量に使用されるコンクリート。永久素材との認識があるが、経年変化による劣化が社会問題化している。

「高度経済成長期に使われたコンクリートの劣化が表面化、診断ニーズは今後ますます高まる」。県コンクリート診断士の石川裕夏会長は組織化の理由をこう話す。

制度発足の発端は、一九九九年に山陽新幹線で起きたトンネル剥落事故。その後、全国各地で高架橋のコンクリート片剥落が相次ぎ、コ

▷県コンクリート診断士会

従来のコンクリート関連の資格は、新構造物に使う設計・施工を主眼としているのに対し、診断士は既存構造物のひび割れの原因解明、耐力・耐震の評価、補修法を提案する。

「設立当初は認知度は低く低迷したが、官公庁の認識は強まり、現在では会員受注分は推計百件程度（年間）」。診断士の存在を認知してもらう設立当初の目的は「ほぼ達成しつつある」。

「東京でも近く会が発足する運びで福井発の試みが全国に普及しようとしている。行政側の建造物に対するとらえ方は変化している。老朽化に伴い新築するスクラップ&ビルドは後退。耐久性をつけ維持する方向性への転換もみられ、コンクリート診断の追い風になっている」。

「今はひび割れ、老朽化してから診断するケースが多いが、今後は予防的な点検（診断）業務が中心となる」とみている。



研修で鉄筋探査機の使用法を学ぶ県コンクリート診断士会メンバー＝昨年12月、若狭湾エネルギー研究センター

▼劣化予防へ存在感増す

鉄を作る際に出る副産物を入れた高炉スラグ入りセメント使用が指定され主流化。「診断する上では素材を知らないといけない」と会としても研修を進めていく考え。